

国語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

平成15年度から実施の高等学校学習指導要領を受け、平成18年度に試験科目が「国語」に一本化され、本年度は「国語」として9回目の試験である。

高等学校学習指導要領では、必修科目は「国語表現Ⅰ」及び「国語総合」の2科目とされ、生徒はそのいずれかを選択することとなっている。「国語表現Ⅰ」は適切に話したり書いたりする力など、現代の社会生活に生かすことのできる言語能力の育成を重視している。「国語総合」は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」及び「言語事項」の3領域1事項から内容を構成し、古典と近代以降の文章を含む総合的な科目である。標準単位数は「国語表現Ⅰ」が2単位、「国語総合」が4単位である。

高等学校「国語」教科担当としての立場から、本年度の試験問題を検討した。検討を加える視点として次の5点を設定した。

- (1) 高等学校学習指導要領の目標・内容等にそった問題（素材文・設問）であったか。
- (2) 高等学校における授業や学習活動の実態に配慮がなされた問題であったか。
- (3) 受験者の基礎的・基本的な国語力を幅広く総合的に判定し得る問題であったか。
- (4) 素材文は「国語表現Ⅰ」「国語総合」の教科書で扱われる程度のものであり、高校生が読むのにふさわしく、魅力的なものであったか。
- (5) 設問は、内容・形式・選択肢などによく検討が加えられ、受験者の読解・思考過程を想定するなどの配慮がなされていたか。

以上の視点に立ち、「試験問題の内容・範囲等」「試験問題の分量・程度等」「試験問題の表現・形式等」の面から、第1～第4問までそれぞれに検討を加えて、評価し意見を述べる。

2 試験問題の内容・範囲等

第1問 漢文学者である齋藤希史^{さいとうまれし}の評論『漢文脈と近代日本』からの出題である。江戸時代、幕府の教化政策を背景に、士族階級の基本的素養として広まった漢文の読み書きが、武士の立身にとどまらず、士人的エトスという独特の思考や感覚の型をもたらし、統治者としての意識を自然と植え付けていったことを述べている。類似点と相違点のそれぞれにおいて中国の士大夫の事例と対比させながら論じている文章である。儒教や漢文といった素材に多少とまどった受験者もいたと思われるが、明解なりード文が付されており、丁寧かつ明快に論を推し進めているため、読み始めの印象よりも趣旨を捉えやすかったはずである。設問においても、主題に迫る問いに加え、表現や段落構成を吟味させるものもあり、全体的なバランスが良い。枝葉末節ではなく文章の根幹を捉える力を要求している意図が明確であり、高校現場に指導の方向性を与えてくれる良問だと評価したい。本文の分量は約4,400字で昨年度と変わらないが、段落番

号が付されていたのは目新しい。

問1 すべて常用漢字であり、適切な出題である。(ウ)の「軍功」はイメージしづらい言葉だが、武士が「手柄」を競うという文脈から判断できる。

問2 筆者がなぜ中国に話を広げようとするのか、その理由を読み取らせる設問である。漢文を介して士大夫と士族が繋がっていることが理解できているかを確認する上で適切な設問である。

問3 傍線部にある「ことばが人を得」という比喩表現の理解を中心として、中国で進行した出来事を読み取らせる設問である。前問の流れを引き継ぎ、漢文が士大夫の形成（再生産）に繋がっていることを確認させる適切な設問である。

問4 武士が吏僚として生きていく根拠を確認する適切な設問である。16「武芸は精神の領域に属する行為」、17「学問は士族が身を立てるために必須の要件」になっていったことが、18「治国・平天下に連なる」ことを読み取れば正答にたどり着く。

問5 問4を踏まえて、「漢文で読み書きすること」が、なぜ「道理と天下を背負う」ことになるかを問う設問である。本文の主題に最も迫る良問だと考える。

問6 (i) 筆者の丁寧な話の運びを考慮しながら、消去法で絞り込んでいけば正答にたどり着ける。ただ、正解②の「やや極端な言い方ですが」「逆に言えば」「正直に言えば」を、この文章の表現の特徴として指摘するのが妥当かどうか、意見の分かれるところだと思われる。

(ii) 文の構成に関する設問である。論の展開を問う設問として適当であった。本文に先立つ段落番号のただし書きを見落とさず、最初からこの設問を意識しながら読んだ受験者と、最後になって改めて全二十段の構成を確認し直した受験者とでは、解答時間はかなり違うものになったと想像される。

第2問 岡本かの子の小説『快走』からの出題である。昨年度の小説『地球儀』と同様、作品全文を本文として、完成された一つの小説世界を読み解いていく姿勢を重視している。日中戦争が勃発し、庶民の暮らしに様々な統制が加えられていく昭和初期の鬱屈とした日本の世相を背景としている。「国策」はもとより家庭や女性という立場に縛られた日々の生活に抗うように、一人ひそかに夜のランニングをすることで生を確認する道子を軸にストーリーは進む。当初は、娘の不審な行動を怪しんでいた両親が、ラストシーンで「快走」を果たして明るく笑い合うところで作品が結ばれる。娘の道子から両親へと、「快走」の主役が巧妙に切り替わっていくところに短編小説の醍醐味を感じさせる。登場人物や場面状況が、会話を効果的に用いた軽やかな筆致で描かれているため、作品の狙いを含めて内容は非常に読み取りやすいが、本文の総文字数は約6,300字あり、各設問と本文の照合に時間の掛かった受験者は多かったはずである。

問1 いずれも語句本来の意味を問う基本的な語彙問題である。

問2 「ほーっと吐息をついて」縫い物をやめた道子の心情を問う設問である。自分の頑張りを虚しく感じた道子の心情を読み取りたい。「屈托」が一般的な「くよくよする」の意味ではなく「あきて疲れる」の意味で使われているものの、文脈からそれを読み取ることは十分に可能である。道子の束縛、抑圧された感覚を確認する意味で、小説読解の最初に位置する

設問として適切である。

問3 ランニングの後、銭湯で汗を流す道子の内面の動きを問う設問である。問2で確認した束縛感からの解放へと問いが繋がっていく点で良問だと考える。

問4 あえて傍線を使わず、90行の中から人間関係を読み取らせようという意図が感じられ評価できる。

問5 転調を見せる作品後半で描かれる、父母の二つの笑いの違いを読み取らせる設問である。父母が親の立場を離れて、純粹に走る喜びを感じ合い、戦争がもたらした抑圧感を突き破るという結末に気付かせる設問である。問4と同じく3行選択肢ではあるが、全体を詳細に分析する必要があった昨年度の設問に比べれば難しくない。

問6 四つの場面ごとの表現に関する設問で、選択肢に指摘されている要素の有無を確認し丁寧に読み解いていけば正答にたどり着く。「快走」の主役交代や色彩表現の効果に気付かせる点で良問だと言える。昨年度の3行選択肢から2行選択肢へと変更になっているが、細かなポイントを本文とつき合わせていくのに時間が掛かったはずである。

第3問 古典文学の傑作と評される『源氏物語（夕霧の巻）』からの出題であるが、本試験で出題されたのは今回が初めてである。主語はもちろんのこと、特に会話において省略語が多い文体であり、場面や心情も複雑であるため、動作の主体を捉えて話題の展開を押さえることは容易ではない。設問に関しては、問1～問3までは古語や文法における基本的な事項を問う設問であった。しかし、問4以降は一気に設問のレベルが上がっているため、受験者は解答時間を大きく消費したはずである。本文の字数は約1,500字で、昨年度と比べて大きな変化はない。

問1 基本的な語句の解釈問題である。(ア)の「なめげさ」は形容動詞「なめげなり」から語義を連想し、「見じ」の主体が大將だと理解できれば正答が選べる。(イ)は基本古語「らうたげに」と謙譲の補助動詞「聞こゆ」を、(ウ)は慣用表現の知識を確認するものだった。

問2 a～dのいずれも迷う余地のない文法的説明問題である。

問3 「姫君たち～率ておはしましにける」という挿入句があるものの、主語が三条殿でなく、大將殿だと分かれば正答が選べる。文脈把握が正確にできているかを問う意味で適切な設問である。

問4 「あやしう～をかしうおほゆらん」を読み取る設問である。(注)12が解答の手がかりとなっているが、「かしこ」を「落葉宮おちばのみや」と捉えるのは受験者には難しかったらうと思われる。

問5 昨年度までの和歌の問題から切り替わった会話文A～Cの説明問題で、出題形式として目新しいものではないが易しくはない。主語で誤答と判断できるのは③だけである。後は三つの応答の的確な理解を必要としているため、3行にわたる選択肢を吟味するのは相当厳しかったと思われる。また、消去法で正解が①であると判断できるものの、「子どもたちのことはあとにはよろしくと言っている」という表現が適切かどうか疑問が残る。

問6 表現の特徴と内容との両方を尋ねていた昨年度の設問と比較すると、内容だけを問う設問であるため受験者の負担が減った。しかし、それぞれの選択肢をしっかりと吟味するには、内容を正確に把握する必要があり、難易度は低くない。

第4問 明代前期の官僚・文人である陸樹声りくじゆせいが書いた随筆『陸文定公集』からの出題である。甘

い筈^{たけのこ}と苦い筈のそれぞれがたどる運命を対比させながら、一見役に立たないように見えるものが実は天寿を全うするのだという、荘子の思想「無用の用」について説明した文章である。荘子の思想に対する知識と、苦い筈に自分を置いて見る筆者の姿勢に気付けば読解しやすかったと思われる。昨年度よりも設問数は1問減ったが、返り点も送り仮名もない傍線部が増え、四箇所^{①②③④}の空欄が設けられている本文の体裁から、比較的明快な本文の内容にもかかわらず、難しく感じた受験者が多かったかもしれない。設問は7問に減ったが、最後の問6、7は時間の掛かる設問であった。総文字数は184字で、昨年度の198字から14字減少した。

問1 昨年度の熟語問題から、漢字の意味を選ぶオーソドックスな設問に戻った。本文に即した漢字の正確な意味把握を求める設問であるが、(2)の「尚」はやや難しかった。

問2 傍線部の返り点の付け方と読み方を確認させる設問である。「斬」が難しいが全ての選択肢で「不」とセットで「とらず」と読んでいるため、「好事者」は何を「とらないのか」を考えれば、「方に長ずる」ものを目的語とするのが自然である。やや時間は掛かるが漢文の文構造の理解を求めている点で適切な設問である。

問3 接続の助字を手がかりにしながら、文と文との関係を考えさせる空欄補充問題である。基本的な助字の知識と漢文の対句構造が理解できていれば易しい設問と言える。

問4 再読文字「猶」を問う基本的な設問で、返り点も付いているので平易である。

問5 傍線部の書き下し文を選ばせる設問である。「貴・賤」と「取・棄」の対比と併せて、二重否定「莫不～」が理解できれば、訓点は付されていないものの無理なく正答を選べる。筈のたとえば人間の話に切り替わる箇所を取り上げた適切な設問である。

問6 本文を三つに段落分けする設問で、短い本文だがきちんと正答を導くためには再度、本文全体を確認する必要がある。話題転換の発語である「夫」に気が付けば選択肢を絞り込めるが、①と③のどちらを正答とするかで迷った受験者が多かったのではないかと推察される。論の展開を問う設問であることは評価するが、④を不正解とする明確な根拠に欠けていたかもしれない。

問7 訓点が付されない傍線部の読み方と筆者の主張を読み取る設問である。構文「以A為B」は一つのヒントになるが、3行にわたる選択肢を吟味するのは難しく、「豈～耶」を一般的な反語として捉えた受験者は混乱したはずである。句形をただ覚えているだけではなく、論旨を理解した上で適切な用法を選んで解釈できるかを問うことは評価したい。

3 試験問題の分量・程度等

(1) 分量について

試験問題の本文の字数を過去2年間と比較すると次のようになる。

	平成24年度	平成25年度	平成26年度
第1問 評論	約3,900字	約4,400字	約4,400字
第2問 小説	約5,300字	約5,500字	約6,300字
第3問 古文	約1,400字	約1,400字	約1,500字
第4問 漢文	215字	198字	184字

(2) 設問数について

制限時間80分に対して、大問が4問、大問ごとの設問は、第1～第3問は各6問ずつで、第

4問だけが7問であった。今年度、第4問の設問が一つ減ったのは、第2問本文の字数増加を配慮した結果と考えられ、妥当な措置だったと判断する。結果として全体の解答数も昨年度より一つ減り、36であった。

(3) 難易度について

第1問評論は、本文の分量に大きな変化はなかったが、平易な文体で論旨明快に書かれているため、受験者の読解力を測るのに格好の素材文だった。設問も問2～問5まで、論の展開を追う形で、読解のポイントを尋ねている。それらを解くことによって本文の全体像が確認でき、受験者が安心して読み解けるよう丹念に作り込まれた評論問題であり、難易度は標準と言える。

第2問小説は、昨年度と同じく作品全文を本文としていたが、直線的にストーリーが展開していく今年度の方がはるかに読み取りやすかった。戦争による統制からの心理的解放という主題も、多くの受験者の共感が得られたと思われる。本文、設問とも難易度は高くないが、設問を検討する上で読み返す本文の分量が増えた影響で、解答に時間が掛かったと思われる。

第3問古文は、本文の長さこそ昨年度とほぼ同じであるが、難易度は上がった。『源氏物語』特有の複雑な人間関係の中で、動作の主体を整理しながら内容を把握するのは受験者には相当厳しかったと思われる。前半の設問では基本的な単語、文法の確認も用意されていたが、後半の三つの問いはかなり難しい。

第4問漢文は、返り点や送り仮名がない傍線部が複数あり難しいという印象を与えるが、実際には本文の論旨は読み取りやすく、荘子の思想にも深くは踏み込んでいないので素材文としては易しいレベルになる。設問に関しては、問5までは漢文の基礎的な知識を問う設問だが、最後の問6、7の難易度が高いため、総合的に難易度は標準とする。

全体的には小説の長文化に伴う選択肢吟味の煩雑さと古文の難化が顕著で、平均点は昨年度に引き続き下がった。

4 試験問題の表現・形式等

(1) 表現について

設問の表現は全て「適当なもの」「正しいもの」を選ぶ形式で統一されており、受験者が内容を理解していながら不注意により不正答になるような事態を避けるという点で適切な表現であったと考える。選択肢の表現もある程度形式を揃えていて読みやすさへの配慮が見られた。

(2) 配点について

第1～第4問までを各50点満点とする配点に変化はない。解答一つ当たりの最高点について見ても、昨年度同様、最高は8点であった。設問数は37→36へと一昨年度の形に戻された。

(3) 形式について

選択肢については、6例から二つを選ぶものが1問、4例から一つを選ぶものが2問、残りは全て、5例から一つを選ぶもので、良い意味で昨年度の形式を踏襲していた。

5 要約 (意見・要望・提案等)

本年度の平均点は、98.67点で、昨年度の101.04点より2.37点下がった。受験者は503,587名で、昨年度より12,566名の減となった。毎年50万人以上の受験者がいるセンター試験が、高等学校の

授業に与える影響はきわめて大きい。来年度以降のセンター試験において本年度の結果を踏まえ、さらによりよい問題作りを進める上で参考とされることを期待し、意見・要望等を以下に示す。

- (1) 今年度の本試験は、全体的に論構成を重視しており、本文を大局的に捉える力を要求している点、さらには各設問を解いていく中で全体把握ができるよう工夫がなされている点に大きな特徴が見られた。傍線部前後の情報処理だけでは正解できない設問を多く設定したことは、読解力や思考力を身につける重要性や意義を示したものとして高く評価したい。出典では、第3問で高い読解力を必要とする『源氏物語』が出題された点が目を引いた。高校古典を学習した証として『源氏物語』読ませたいという作問者の意図は理解できるが、「国語総合」のレベルをやや超えている感も否めない。設問や選択肢の工夫によって問題文の魅力が引っ張り出される可能性を期待し、今年度採用された本文は、第3問を含めて、概ね学習指導要領の趣旨を踏まえた文章から出題されていると評価する。
- (2) 昨年度の問題と比較した場合、現代文は本文、設問とも標準レベルの難易度に落ち着いたものの、小説の分量に関しては大幅に増加した。古文の難化や設問の性質等の要因と併せて、解答に時間が掛かった受験者は多かったと考えられ、これが今年度の平均点に大きな影響を与えていると想像する。設問の難易度には適度に高低差を付ける工夫もなされているが、制限時間内で第1問～第4問まで無理なく解ける問題構成をさらに追求していただきたい。
- (3) 第1問について、漢文や儒教が話題に上っている点にやや抵抗感を抱いた受験者がいるかもしれないが、リード文と（注）を確認すれば読解には支障がない。太平の世に生きた武士たちの拠り所を漢文学習という側面から指摘する本文は明快で、受験者の論理的思考力を問う意味で適切であった。設問も表現形式がほぼ揃えられていて読みやすく、傍線部の理解を通して全体の趣旨に迫る工夫がなされていた。
- (4) 第2問について、今年度も全文を掲載できる短編小説を題材としていることは評価したい。スピーディーな展開に合わせて主役が鮮やかに切り替わっていく仕掛けに短編小説の面白さを感じられ好感の持てる素材文だった。戦時下の昭和を描いた小説ということで（注）が17個付けられたが、不要なものも含まれていたのではないかと思われる。
- (5) 第3問について、古文をしっかりと読みこなす力を求める問題である。文法知識を問う前半の設問は易しいが、後半の設問では人物関係の把握や正確な解釈が求められ難しい。本文に付されたりード文、人物関係図、（注）などが読解のヒントにはなっているが、素材文そのものが難解であったと思われる。
- (6) 第4問について、前半の筋のたとえば、末文における荘子の「無用の用」に結びついていく文章であるが、思想の中身には言及していない。基本的な漢文の知識、文構造、句形を確認する設問が多かったが、論構成、筆者の主張を理解しているかを問う設問も含まれており、全体としてバランスが良かった。今後も、文構造や論構成などを考えさせる出題を続けて欲しい。